遠州弁の認知度の高まりとその要因

三谷啓人 23B30807
東京工業大学情報理工学院

1. はじめに

Research Question：遠州弁の「ら抜き言葉」を標準語と混同する人は多く、インターネットを通じて身につける人が多い

人々のら抜き言葉の使用状況と方言との接点を調べることでこの問いに対する答えを導く。

2. 方法

Google Formでアンケートを作成し、Xを用いて不特定多数の人に回答を呼びかける。「ら抜き言葉」を含む文章をいくつか挙げ、それに方言が使われていると思うか答えてもらう。また、普段どのような場所で方言に触れるかを聞くなどする。

3. 結果

アンケートは39名の方に回答頂いた。その結果の一部をまとめる。

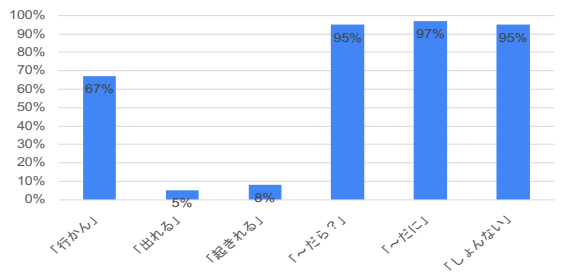

図１：方言だと気づいた割合

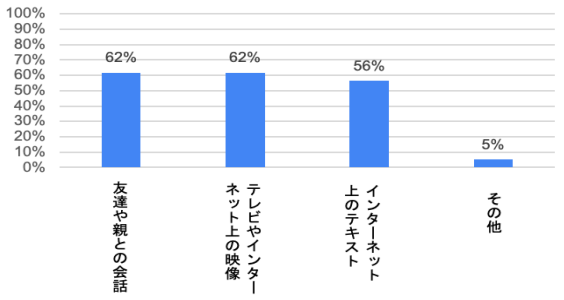

図２：どのような状況で方言に触れるか

図1では、「出れる」「起きれる」といった「ら抜き言葉」の割合が低く、図2ではどの項目も大差がないことがわかる。

4. 考察

アンケートによる調査結果から、「ら抜き言葉」を日常的に使う人はかなり多く、それが標準語ではないということを知っている人は少ない。また、遠州地方出身の回答者も4人いたが、その全員が「ら抜き言葉」を方言と認識していなかった。「行かん」も方言であるが、「～だら？」や「～だに」ほどは方言だと認知されていなかった。若者言葉だと思う人もいたのかもしれない。また、「普段ら抜き言葉をつかているか」という質問に対し、「多分無意識に使っている」が46%、「使っているが、使っている自覚があり、使わないこともできる」が44%、「使っていない」が10%であったことから、「ら抜き言葉」を使っている人のうち半分近くが無意識に使っていて、標準語と混同している人が多いと考えられる。「普段主にどんなところで方言に触れるか」という質問に対しては、人との会話で触れる人と、テレビやインターネット上の映像やテキストで触れる人が半数以上で、それ以外は状況が思いつかないか、方言にほとんど触れていない人だったと思われる。インターネットの発達でさまざまな方言に触れる機会が増えたと思うが、それによって自分の思う標準語が本来の標準語とは違うものになってきているのではないだろうか。

5. おわりに

今回の調査ではGoogle Formを用いて「ら抜き言葉」の使用状況と方言との接触機会などを調べた。この調査により、「ら抜き言葉」を標準語と混同する人は多く、方言に触れる機会はインターネットを含む様々なメディアやコミュニケーションの場に見られることがわかった。方言に触れることが身につけることと直接結びつくかはわからないが、仮説はある程度正しいと言える。

文献：
中山惠利子, 遠州方言の「ら抜き言葉」――遠州地方の教員と生徒に対する調査から ――, 阪南論集. 人文自然科学編, 56, 1, p.1-17, 2020-10